

激動の時代、 益城町出身の 「聖人」は 台湾にいた

出生から台湾に渡るまで

台湾で今もなお、「大甲の聖人」と敬愛される人物がいます。益城町出身の志賀哲太郎です。

彼は慶応元年（1865年）に肥後国田原村（現在の益城町田原）で鍛冶屋の長男として生まれました。幼少のころから向学心が旺盛で、家の手伝いをしながら学業に励みました。

木山や神水の私塾で陽明学や英語、仏典などを学び、21歳の時に上京。法律を学ぶため明治法律学校（現在の明治大学）に入学しました。父の死去に伴い帰郷した哲太郎は、九州日日新聞（現在の熊本日日新聞）の記者になりました。

しかし、台湾の日本統治が始まった翌年の明治29年（1896年）12月、哲太郎は台湾に渡り、教育の世界に進むことになりました。

日本統治が始まったころ、1%程度だった台湾の児童就学率は終戦間近の昭和19年（1944年）には93%と、世界でもトップレベルの水準になりました。

哲太郎はこの黎明期に台湾に渡り、台湾の子どもたちへの教育に身を捧げたのです。

渡台の背景にあったもの

熊本に帰郷し新聞記者として活躍した哲太郎は、全国を行き来し、政客との交流を深め、政情を調査しこれを記事にしました。

新聞記者として活躍する傍ら、佐々友房らと政治活動にも従事し、政界の闘士とも呼ばれていました。あるとき政界の実情に嫌気が差し、明治27年（1894年）に九州日日新聞を辞め、その翌年に所属していた政党からも離れ、政界と一切の縁を切ります。

一方、新聞記者として在職していた明治23年（1890年）に、明治天皇による「教育ニ関スル勅語」が

発布されます（熊本藩士であった井上毅、元田永孚らにより起草された）。この内容は、幼いころから四書五経や陽明学を学んだ哲太郎の思いに通じるもので、教育者の道を志す大きな転機となりました。

教育への道を歩み始めた哲太郎は、菊池郡原水尋常小学校（現在の原水小学校）などの代用教員を務めましたが、型にはまりすぎた教育方法などに失望。ちょうどその頃、台湾では日本による統治が始まりましたが、匪賊がはびこるなど、治安はまだ安定していませんでした。統治を司る台湾総督府は教育こそ最優先であると「芝山巖学堂」という小学校を設立しましたが、匪賊に襲われ、

